

独話聞き取りにみられる問題処理のストラテジー

水田 澄子*

キーワード: 独話, 聞き取り, 問題処理, ストラテジー, 連鎖

要 旨

日本語母語話者(以下日本語話者)と中国人日本語学習者(以下学習者)の聞き取り過程で観察された問題と、被験者のその後の問題処理のストラテジーを分析した。

聞き取り上の問題が起きる原因は、六つのレベルに分類された。この六つの原因は、日本語話者にも学習者にもみられた。相違点は、日本語話者がテキスト上の意味解釈に起因する問題が多いのに対し、学習者は言語的知識の不足が大きな原因となっていることである。問題処理のストラテジーとして、「問題特定」にはじまる五つの連鎖が被験者のプロトコルから抽出された。日本語話者と学習者の共通点は三つ挙げられる。「問題特定」だけで終わる処理法が半数近くあること、「推測」を使った問題処理のストラテジーが多いこと、生じた問題を解決し「確認」または「精緻化」へのストラテジー連鎖が観察されることの3点である。上記の3点めは学習者の言語的知識が足りなくても聞き取りの達成が可能であることを示している。しかし、「問題特定」から「自己モニター」あるいは「聞き流し」と続く連鎖は学習者にはみられず、使いにくいストラテジーがあることがわかった。

さらに、被験者の口頭要約で測定した聞き取りの結果は、問題を解決して既存の知識に新しく組み込んでいくには、「問題特定」から「推測」、「保留」へ、そして「確認」、「精緻化」へと続くストラテジー連鎖が効果的であることを示していた。

1. はじめに

講義や講演などの「独話」は、話し手・聞き手の立場が固定して一方的になされる発話¹であり、話し手・聞き手の立場が互いに交換されて展開される「対話」とは異なる側面を持つ。聞き手が話し手のスピードや話題、語彙などを変えられないからである。したがって聞き手からの制御性という観点から考えると、独話の聞き取りは母語話者にとっても難しいものであると考えられ、第二言語知識の不足する学習者にはさらに深刻なものとなる。

* MIZUTA Sumiko: 名古屋大学大学院文学研究科日本言語文化専攻(博士課程後期課程)。

¹ 国立国語研究所編(1963)『話しことばの文型(2)——独語資料による研究』。

講義理解のための学習項目の設定や教材開発への試みが行われてきているが、これらの教育実践を理論的に支える研究は、聞き取りの結果から論じているものが多い。聞き取りが、聞き手が文脈情報や既存の知識を手がかりにテキストの意味を構築するという能動的で意識的な過程であることを考えると、聞き取り過程に着目した実証的な研究が必要だと思われる。

本稿では、以下の研究課題を設定し、調査結果を分析する。

1. 独話聞き取り過程で生じる問題を、日本語母語話者(以下日本語話者)と日本語学習者(以下学習者とする)を対照させて分析する。
2. 聞き取り上の問題を処理するために使われた両者のストラテジーを分析する。
3. 問題処理に使われたストラテジーを聞き取りの結果に関連づけて考察する。

母語話者と学習者それぞれの聞き取り上の問題の分析が行われ、両者の問題処理に関するストラテジーの異同が明らかになれば、学習者に対する教育方法や教材開発に貢献できるものと考えられる。

2. 独話聞き取りのストラテジー

独話テキストと聞き取り結果の関連についての研究では、熟達度が低い学習者が繰り返しや言い淀み、言い直しなど、テキスト中の冗長性に困難を感じていること、談話マーカが独話聞き取りに効果を与えていることが指摘されている(重松 1985, 1987; Chaudron and Richards 1986; Chiang and Dunkel 1992)。しかし、学習者の困難点はテキストの冗長性から引き起こされるだけではなく、他にもいろいろな問題が生じているはずである。それらの問題を明らかにするには、聞き取りの結果だけでなく、聞き取り過程の観察が必要となる。

また、聞き取りのストラテジーに関する先行研究には、O'Malley et al. (1989), O'Malley and Chamot (1990), 古川他(1992)があるが、問題処理に焦点を当てた研究は筆者の知る限りでは行われていない。

本稿では、独話聞き取り過程で観察されるストラテジーを O'Malley et al. (1989) から以下のように定義し、特に聞き取り中に生じた問題を処理するためのストラテジー使用に関して考察する。

〈ストラテジーの定義〉

新しい情報を学習したり保持したり、あいまいな情報を理解するために活性化された心理過程をストラテジーという。ストラテジーの明確な特徴はそれらが意識的なもの、あるいは意識化可能なものであること、理解や学習、保持を強化するためのものであることである。

3. 研究方法

3-1. データの収集方法

被験者は日本語話者 5 名、中国語を母語とする学習者 10 名である。すべて、大学もしくは大学院に所属する学生である。学習者には平成 2 年度日本語能力試験 1 級を実施した。その結果、1 級合格レベルの平均 313.3 点を得ており、上級レベルの学習者と認められる。聞き取り調査に使用した 2 本のテープは、一般の日本人向けに話された講演テープを編集したものである。演題は「子どもたちの将来を見つめて」(9 分 36 秒)と、「12 週間ウォーキング健康法」(11 分 14 秒)である。聞き取り過程の観察方法には、回想法を用いた。被験者にはテープを聞き終わった後再度テープを聞いてもらい、取ったノートをみながら、聞いている間に考えたり頭に浮かんだりしたことを、その都度報告してもらった。

被験者の聞き取りの結果は、口頭要約で測定した。測定に先立ち、日本語教師 5 名による箇条書き要約採点リストを作成した。要点が述べられているかどうかのみを採点の対象とし、被験者の表現力が結果に反映しないよう配慮した。

3-2. データの分析方法

まず、被験者の言語報告を書き起こし、カード化した。次に書き起こしたプロトコルからストラテジーを抽出した。ストラテジー抽出のための分析の視点は次のように設定した。

1. 意識化が可能な過程であることを示している。
2. 理解や記憶の促進に貢献する過程であることを示している。
3. 問題が生じている過程であることを示している。
4. 理解や問題処理のために使われた手がかりを示している。

上記の条件に該当しないプロトコルは除外し、さらにストラテジー使用を示しているプロトコルを、聞き取りに際しどんな機能を果たしているかという視点から分類した。

次の〈例〉で示すプロトコルは、被験者が聞き取り過程を言語報告したものである。被験者 J2, J4, F4 は下に示すテキストを聞き、それぞれ/①~③ でテープを止めて言語報告を行った。採集されたプロトコルから上記の手順を経てストラテジーを抽出した。以下の例の【 】内はテキスト、「 」内は抽出されたストラテジー、《 》内は被験者(日本語話者 J, 学習者 F)のプロトコル、___ はストラテジー使用を示すプロトコル、()内は調査者の発話を示す。

【そうしますと、子どもというのはですね、いつでも昔子どもだった者からみて何を考えているのかわからないという存在として大人と関係を作っているのだと。これ、本当にですね、落ち着いて考えてみますと、ほんとごく当たり前のことなんです。わたくしが今申し上げていることは、だってこれをもう少し年齢を上げてみましようか。わたくしぐらいの年輩の者と若い親夫

婦、わが子の状態みましてつまり、若い嫁さんなんかをみましてですね/③、今の若い女の人はどうしてこんな子どもの育て方をするんだらうという嘆きや愚痴をずいぶんこぼしますよ。で、これをもっとこうおろしてきたのが大人と子どもの関係から出る愚痴なんだらうと思うんですね/①②】

上記の一節は、いつの時代も子どもは大人からみてわからない存在であり、そのギャップは、子どもの育て方に対する講演者ぐらゐの年輩の人と若い嫁さんとの意見の相違にもみられるという二つの例が挙げられているところである。

〈例1〉のプロトコルは、被験者J2が同じような二つめの例が挙げられているとして、後続情報を聞き流していることを示している。〈例2〉は、同じテキスト上の位置で報告されたものだが、この被験者J3は、二つの例の関連がわからないとして問題を引き起こし、要約課題に対する自分の聞き方をモニターしていることが読み取れるプロトコルである。

〈例1〉「聞き流し」

J2 《このへんの嫁さんがどうのっていうのは聞き流してた。おんなじことの繰り返しで言葉変えてるだけだなっていう、思ったから》

〈例2〉「問題特定」→「自己モニター」

J3 《こここのところの、お嫁さんとの関係と大人と子どもの関係がどう関係してるのか、初めてのはピーンと来なくて、で、あ、こどうやって要約しようかなって、ちょっと思った》

〈例3〉は、学習者F4がテキスト中の嫁さんという語が理解できず、問題を認め、その問題について推測していることを示している。

〈例3〉「問題特定」→「推測」

F4 《ヨメサン、ヨメサン。わかりません、この言葉。たぶん年輩の人の娘とか息子とかその年代の人たち》

4. 聞き取り上の問題

4-1. 聞き取れない原因の分類

上記の手順で抽出されたストラテジーの中で、問題が生じた時に報告される「問題特定」ストラテジーは、下記4-2. 表1に示したように、日本語話者に平均8.8件、学習者に平均19.1件みられる。したがって両者の間には、有意な差がみられ($t=-2.22$, $p<0.05$), 学習者の方がより多く聞き取り上の問題を報告しているといえる。

ここでは、両者に特定された聞き取り上の問題を以下のように分類し、日本語話者と学習者を対照させて分析する。

まず聞き取り上の問題を引き起こした原因に着目し、次の六つに下位分類した。1. [分節化], 2. [辞書的意味], 3. [テキスト上の意味], 4. [テキストからの派生問題], 5. [話し手の意図], 6. [その他の場面要素]である。

1. [分節化]の問題は単音あるいは語認知ができないレベル, 2. [辞書的意味]の問題は語句の文字通りの意味がわからないもので, 未知語, 同音異義語や多義語, 諺などが理解できないレベルである。被験者は、「脂肪」を「死亡」と理解し問題を引き起こしていたり, 「(家が)燃える」はわかるが「(脂肪が)燃える」はわからないと問題を特定したりしている。3. [テキスト上の意味]は, 語句の辞書的意味は知っていてもテキスト上での意味がわからないという問題である。つまり指示詞やその他の語句の指示対象, 接続語句と前後のつながり, 省略された語句や言い換え・繰り返し表現, 言い間違いなどテキスト上の語句や文のつながりがわからないレベルの問題である。F《これをみつめて。で, むずかしいね。これを。これって何? 何?》などのプロトコルで示される。次のレベルは, 理解したテキスト内容から派生して生じる問題を特定する 4. [テキストからの派生問題]である。「12週間歩き続けることがいい」というテキストから「どうして12週間なのか」とテキスト理解から派生した問題が特定されている。その他に「なぜケーキの話をしているのかわからない」などの, 5. [話し手の意図]がわからないレベル, 「講演会場の笑いの意味がわからない」などの, 6. [その他の場面要素]のレベルの問題に分類された。

4-2. 聞き取れない原因の分析

被験者に特定された問題を上記の六つの原因別に分類すると次のような表になる。

表 1 聞き取り過程で特定された問題

問題を引き起こした原因	「問題特定」報告件数 J (n=5) F (n=10)								
	報告件数		一人平均件数		分散		t 値	問題別件数比率	
	J	F	J	F	J	F		J	F
分節化	6	98	1.2	9.8	0.56	44.36	*-2.68	13.6%	51.3%
辞書的意味	4	54	0.8	5.4	0.96	22.04	-2.02	9.1	28.3
テキスト上の意味	25	22	5.0	2.2	2.8	2.36	*3.01	56.8	11.5
テキストからの派生	4	9	0.8	0.9	0.56	0.89	-0.19	9.1	4.7
話し手の意図	1	4	0.2	0.4	0.16	0.44	-0.58	2.3	2.1
その他の場面要素	4	4	0.8	0.4	0.56	0.24	1.15	9.1	2.1
合計	44	191	8.8	19.1	5.76	90.69	*-2.22	100.0	100.0

(* $p < 0.05$)

前述したように, 「問題特定」件数は学習者に多くみられるが, それぞれの原因から生じる問題はいずれも日本語話者, 学習者の両者に観察される。つまり日本語話者だからといって[分節

化]の問題がまったくないというわけではない。また学習者にも[分節化]や[辞書的意味]が原因となって生じる問題ばかりでなく高次レベルの問題もみられるということである。このように聞き取り上の問題そのものは、両者に共通して生じ、質的な相違はみられないものと考えられる。

しかし、表1からわかるように、学習者の方に多く特定されている問題は[分節化] ($t=-2.68$, $p<0.05$) である。また学習者の問題は、[分節化]と[辞書的意味]がわからないものも含めると、その割合は学習者「問題特定」件数の79.6%になる。当然とも思われるが、日本語の知識の不足から問題が生じてくる実態が窺われる。

一方、日本語話者の方に多く特定されているのは、[テキスト上の意味] ($t=3.01$, $p<0.05$) が原因になっている問題である。学習者に顕著であった[分節化]と[辞書的意味]の問題の占める割合は合わせて22.7%にすぎない。これは、日本語話者は日本語の知識不足による問題は少ないが、文脈に沿った理解に問題が生じることが多いことを示している。

5. 日本語話者と中国人日本語学習者の問題処理のストラテジー

5-1. 問題処理のストラテジーの分類

被験者に特定された聞き取り上の問題は上に示した通りである。では、生じた問題の処理のためにどのようなストラテジーが使用されるのだろうか。日本語話者と学習者の用いるストラテジーにはその相違がみられるのであろうか。

被験者のプロトコルから抽出された問題処理のためのストラテジーは、次のように分類される(詳細は水田 1995)。これは、O'Malley et al. (1989) と O'Malley, J. M. and A. U. Chamot (1990) の枠組みを援用したものである。

〈問題処理のためのストラテジー〉

問題特定： テキスト上の語句の曖昧さや話し手の意図の曖昧さなどから理解の面で問題が生じたことを認識する。

自己モニター： 自分の注意の向け方が聞く目的に対して適切かどうかをモニターし、調節する。

推測： 聞き取れなかったり意味が曖昧だったりした語句や文の意味をさまざまな知識を使って推測する。またテキスト上、場面上では表されていないことを推測する。

保留： 重要だと思ったり未知あるいは不明確な語句や文を、記憶にとどめて後続テキストを聞き続ける。

聞き流し： テキストの重要性を判断し、重要性が低いと判断されたテキストの部分について注意力を弱める。

確認： テキストから自分の理解したこと、予測したこと、推測したことが正しかったかど

うかを確認する。

精緻化：聞き取った内容から、既存の知識や自分のそれまでのテキスト理解を修正したり拡大したりする。

内容へのコメント：述べられている論点、結論などテキストの内容を肯定的、否定的にコメントする。

話し方へのコメント：イントネーション、使用語彙、テキストの展開の仕方など話し手の話し方を肯定的、否定的にコメントする。

5-2. ストラテジー連鎖

問題処理に使われた上記のストラテジーを連鎖の観点から分析すると、問題処理に際し、「問題特定」だけで終わり積極的な問題処理がなされないものと、「問題特定」だけで終わらずストラテジーの連鎖を生じるものの二つに大別される。

次の図1は、問題処理過程で観察されたストラテジー連鎖を示すものである。「問題特定」にはじまるストラテジーの連鎖には下記の五つの流れがみられる。

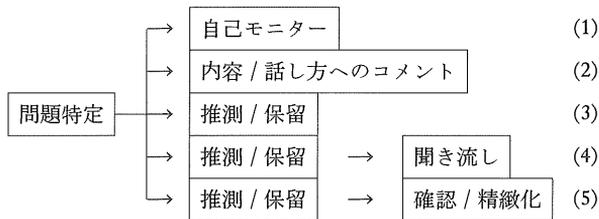


図1 問題処理時のストラテジー連鎖

一つめは、3-2. の〈例2〉で示したように、「問題特定」から「自己モニター」への連鎖で、問題が生じたことによって自分の聞き方を調整するというものである。

二つめは、「問題特定」から「内容あるいは話し方へのコメント」へと続く連鎖である。問題が生じた原因を内容や話し方に帰する処理ストラテジーである。F《このへんはなんべんもなんべんも今の子どもたちとか、今の大人とか同じ言葉を繰り返す、繰り返すと、頭はちょっと混乱が起きた。ちょっとそういう言い方はやめた方がいいと思う》などのプロトコルによって、「問題特定」から「話し方へのコメント」への連鎖が読み取れる。

三つめは、「問題特定」から「推測」あるいは「保留」への連鎖である。F《ナゲキクチ。新しい言葉。(あまりわからない)うん。だいたい嘆息してる気持ちかな。こういう意味で取ってるけど》などのプロトコルで、「問題特定」から「推測」への連鎖が示される。

四つめは、「問題特定」から「推測」あるいは「保留」、さらに「聞き流し」へと続く連鎖である。聞き取り上の問題は解決していないが、その問題は重要ではないと判断し聞き捨てるという

ものである。この連鎖は次のようなプロトコルから読み取れる。J《このへんで変わり方のことは言っていますが、変わらない面っていうのは一体何なんだろうかな。それはわからなくても話の筋は、子どものことがよくみえれば親としては成功していると言っているんだろうなと思って(聞いてた)...変わらない側面っていうのは、この人はどういうことを言ってるんだろう。(不思議、疑問に思いながら)疑問に思いながら、でも大したことじゃないと》というようなプロトコルである。

五つめは、「問題特定」から「推測」あるいは「保留」のストラテジー使用によって問題が解決され、「確認」あるいは「精緻化」へと連鎖する流れである。F《あ、これ、脂肪はね、最初はなんか、しぼう、死ぬの死亡だと聞き取れたんですけど、もうちょっと後にいくと、ああ、脂肪のことわかる。...しばらくはそれで意味取ってるけど、でもちょっとおかしいと思ってる》などのプロトコルによって、「問題特定」から「保留」、「精緻化」のストラテジー連鎖が観察される。

5-3. 日本語話者と中国人日本語学習者のストラテジー使用の異同

次に上述のストラテジー連鎖の観点から、日本語話者と学習者を対照させて分析する。

表2は、問題処理過程において日本語話者と学習者が報告したストラテジーを示している。ノートテキングは考察の対象とはしないが、外的な問題処理の方法として件数だけを明記した。

表2 日本語話者と学習者の問題処理のストラテジー

連鎖	連鎖件数		連鎖別比率	
	J(n=5)	F(n=10)	J	F
問題特定だけ	21件	120件	47.7%	62.8%
問題特定 → 自己モニター	1	0	2.3	0
問題特定 → 内容 / 話し方へのコメント	4	3	9.1	1.6
問題特定 → 推測 / (保留)	7	55(1)	15.9	28.8 (0.5)
問題特定 → 推 / 保 → 聞き流し	4	0	9.1	0
問題特定 → 推 / 保 → 確認 / (精緻化)	3(1)	6	6.8(2.3)	3.1
(ノートテキング)	(3)	(6)	(6.8)	(3.1)
合計	44件	191件	100%	99.9%

上の表2から、聞き取り上の問題が被験者に特定されただけで、その問題処理のために引き続きなんらかのストラテジーの使用がみられなかった「問題特定」使用件数は日本語話者21件、学習者120件であることがわかる。両者の「問題特定」使用件数(J44件, F191件)に占める割合はそれぞれ47.7%, 62.8%である。したがって日本語話者と学習者はともに約半数が問題処

理のための積極的なストラテジー使用がみられなかったことになる。

しかし「問題特定」ストラテジーだけで終わらず、問題処理のために引き続きストラテジーが使われたものも半数近くある。

日本語話者にみられた問題処理時のストラテジー連鎖は「推測」への連鎖が7件と最も多く(15.9%)、「問題特定」から「推測」あるいは「保留」、「聞き流し」へと続くものが4件(9.1%)、「内容/話し方へのコメント」へと続くものが4件(9.1%)、「推測」あるいは「保留」、「確認」への連鎖が3件(6.8%)、「精緻化」への連鎖が1件(2.3%)、「自己モニター」へ続くものが1件(2.3%)、その他ノートを取る行動へと続くものが3件(6.8%)である。

一方、学習者の問題処理時にみられたストラテジー連鎖は「推測」への連鎖が55件(28.8%)で、日本語話者と同様もっとも多く報告されている。その他のストラテジーへの連鎖は、「保留」、「確認」へと続くものが6件(3.1%)、「保留」へと続くもの1件(0.5%)、「内容/話し方へのコメント」へと続くもの3件(1.6%)、その他ノートを取る行動が6件(3.1%)である。

この結果から日本語話者・学習者の両者の共通点は三つ挙げられる。一つめは両者ともに問題が起きた時は、問題があると認知するだけの「問題特定」ストラテジー単独使用が約半数近くあるということである。したがって、母語話者だからわからない部分の解決がしやすいということではないことがわかる。二つめは、問題処理のために引き続き使われたストラテジーの中でもっともよく使われたものは「推測」のストラテジーであることである。わからない時にそのギャップを埋めようとして、前後のテキストや既知の知識を活用して「推測」する聞き取りの姿勢は、母語、第二言語を問わないものであるといえる。三つめは、「問題特定」から「推測」、「保留」、「確認」へと続くストラテジー連鎖が両者に共通してみられるということである。これは、言語知識の不足する学習者も母語話者と同様に、聞き取り中に生じた問題を解決していることを示している。

両者の相違点として、「問題特定」から「聞き流し」へと続く連鎖と「自己モニター」へと続く連鎖が学習者には観察されていないことが挙げられる。このうち「自己モニター」は、日本語話者にも1件と使用報告が少なく、母語話者にも使用が少ないという可能性もある。しかし、これらのストラテジーの使用報告がみられないということは、テキストに注意を集中しすぎ、情報の重要性への判断をしなかったり、聞く目的を忘れたりしがちな学習者の聞き取りの傾向を示唆している。

6. 未知語問題処理に使われたストラテジーと聞き取りの結果

6-1. 「推測」のストラテジー

独話聞き取り上の問題に直面したとき、日本語話者も学習者も「推測」のストラテジーを使う

ことが明らかになった。では、どのような知識を手がかりとして「推測」を行っているのだろうか。ここではとくに、未知語に対して「推測」のストラテジーを使う時に活用された知識を分析する。分類の枠組みに Haastrup (1987) を援用し、次のように分類した。

- I. 百科辞典的知識
- II. 第一言語の知識
- III. 第二言語の知識
 1. 語構成(接辞・語幹)
 2. 漢字
 3. 語彙的知識(包摂関係・同音異義語・類義語)
 4. 連語
 5. 構文
- IV. テキスト
 1. 直後の語句
 2. 全体的な文脈

推測に使われる知識は単一で使われるわけではなく、テキスト上の情報がきっかけとなって、既存の百科辞典的知識や第一言語、第二言語の知識、テキストの文脈が活性化される。

次の〈例4〉は学習者の百科辞典的知識、第二言語あるいは第一言語の知識である語構成や漢字の知識、テキストの全体的な文脈を手がかりとした「推測」を示すプロトコルである。被験者は「骨粗しょう症」を「こつ××しょう」としか聞き取れなかったが、聞き取った語と全体の文脈を既存の言語知識や百科辞典的知識に照合し、ほぼ病名を正しく推測している。推測に主に使われた知識を下の[]に示したが、これらはプロトコルから推論したものである。L1は第一言語、L2は第二言語、すなわち学習者にとっては日本語の知識を示す。~~~~は、特定された未知語である。

〈例4〉 [百科辞典的知識+L2(L1)語構成+L2(L1)漢字+テキスト全体的文脈]

【...で特に女性の方は骨粗しょう症っていうのが最近言われてるわけですが/】

F 《骨なに症? (わかんなかった?) カルシウムが足りない人のあれかな?》

〈例5〉は、第一言語の知識とテキストの全体的な文脈を手がかりとして「体重」という語句を推測していることを示すプロトコルである。

〈例5〉 [L1知識+テキスト全体的文脈]

【...でそういうことで脂肪が減ることがありますが、体重はあまり気にしないでもいいと思います。要するに体重が増えたからって、必ずしも脂肪は増えたとは限らないんで/】

F 《1回めの時はタイリョウと聞き取ったけど、2回めは体重じゃないかな(と思った。タイリョウって聞いた時に)タイリョク。(あ、タイリョクって聞いた。はあ)タイリョクって聞いたんじゃないかってタイリョ。中国語では××。ちょっとつながってたんで。(どういう意味

ですか)体力と一緒に。(ああ、一緒にの意味で。タイリョ)でも内容とはつながってないかなと思っただ》

〈例6〉は、第二言語(あるいは第一言語)の漢字や語構成の知識を使った「推測」である。

〈例6〉 [L2 (L1) 漢字+L2 (L1) 語構成]

【...で特に女性の方は骨粗しょう症ってのがさかんに言われてるわけですが、年を取りますと /】

F 《コキョウ、この病名の。(わかりませんでした。でも病名だっていうのはわかった)うん。なにに症。症がついて》

〈例7〉は、第二言語の連語の知識とテキスト直後の語句を使って「推測」に成功した例である。被験者が「歩幅」が聞き取れず、「保留」し、「足を広げる」という連語関係、「足」、「後ろ足」というテキスト直後の語句を手がかりに「左と右の足の幅」と推測しているのが観察される。

〈例7〉 [L2 連語+テキスト直後の語句]

【...それからもう一つは歩幅を広げましょうと、もちろん説明したわけですね。/そうすると歩幅を広げるっていうのは皆さんもさっきやったと思いますが、歩幅を広げるためには足でけらなきゃだめですね。後ろ足で前へ】

F 《歩幅。最初聞く歩幅何ですか。あとを聞く。たぶん歩くの足と足。左と右の足の幅。(どうしてわかったのかしら?)「広げる」となんか「足」、「後ろ足」も》

このように「推測」に使われる知識は多岐にわたり、既存の知識が活性化されて「推測」に貢献することが読み取れる。

6-2. ストラテジー連鎖と聞き取りの結果

問題処理としての「推測」にどのような知識が使われたかを上に述べた。では、「推測」を含むどのようなストラテジーを用いることが聞き取りの達成に効果的なのであろうか。ここでは、日本語話者4名と学習者10名に共通して「問題特定」された未知語「HDL コレステロール」の処理ストラテジーを聞き取りの結果に関連づけて考察する。

次のテキストは、先行テキストでウォーキングの効用が二つ述べられ、三つめのメリットとしてHDL コレステロールが増えることが挙げられるところである。

【...それからはっきり HDL コレステロールが増えてまいりました。これはもう本当にはっきり出てまいりました。 HDL コレステロールっていうのは、よく言われるのは善玉のコレステロールというふうに言われておりますが、そういうものが本当に増えてくるという、これも確かなことでもあります。それから血圧が減少してくるといふのがあります...】

このテキスト理解で生じた未知語の問題処理のストラテジーは、以下に示すように3種類観察

される。一つめは「問題特定」だけで終わるものである。二つめは「問題特定」から「推測」へと連鎖するものである。三つめは「問題特定」、「推測」、「保留」から「確認」あるいは「精緻化」へと続くストラテジー連鎖である。

次の F1 から F5 の 5 名のプロトコルは、学習者が上記のテキスト上の語「HDL コレステロール」に問題を認め、「問題特定」ストラテジー使用を報告したことを示している。いずれも分節化で問題を認めたあと、「推測」などのストラテジー連鎖が観察されず、「問題特定」だけで処理が終わっている。

F1 《ここがわからない。さっきなになにロール。あれ、その前の単語わからない》

F2 《このへんちょっとわからないです》

F3 《これ、ここもはつきり、エッチコーなんか何とか、意味わからなかった》

F4 《わかりません》

F5 《さっきの言葉もわからなかった。(今の言葉ね)スピードが早かった》

また、次の F6 から F10 および J1 の 6 名のプロトコルはすべて、「問題特定」から「推測」へのストラテジー連鎖を示している。中でも F10 は、直後の語句だけではなく、「ウォーキングの長所」というテキストの全体的文脈を活用して「推測」のストラテジーを使い、その点が下記の F6 から J1 までの被験者 5 名と異なっている。学習者の中にも、このようにテキスト文脈を生かし上手に推測を成功させていることが観察される。

F6 《これもわかんない。エッチビヤっていうコレ、コレステロール？ わかんない》

F7 《外来語は習って。(わからない)うん》

F8 《何？ 外来語？ エッチディーエル？》

F9 《これ何ですか。わからない。(わからなかった)医学の×××、なんか成分の専門用語。(専門用語ね)これ、わからなかった》

J1 《このへんで医学用語の骨粗しょう症とか、なんたらコレステロールというのが出てきて...コレステロール、え、なんて言ったんだろうなって》

F10 《これもあの、外来語ですけど、なんか利益、長所、ウォーキングの長所。なになに増えてきた。いい、体にいい要素かなと》

さらに次に示す J2, J3 のプロトコルからは、「問題特定」、「保留」、「推測」から「確認」へのストラテジー連鎖が認められる。問題処理のために活性化された知識はテキストの全体的な文脈とテキストの直後語句である。

J2 《この時、コレステロールって全部悪いものだって思ってたから、フーンって、あ、この後に、何だそれはとと思ってたら、善玉コレステロールですよって出てきて、あ、そうなのかって》

J3 《コレステロールが増えるっていうのはよくないことなのに、このエッチディーなんと

かっていうのは増えていって言うてるんだから、ふつうのコレステロールとは違うものなのかと思いました》→《あ、やっぱりねって。いいものなのねって》

また被験者 J4 のプロトコルからは、「問題特定」からノートをとり、「精緻化」への連鎖がみられる。

J4 《ここでエイチディーエルというのが聞き取れなくて、エイチイーエルかと思って書いたんですが、自信がないなとか思いました》→《これでエイチディーエルというのがはっきりして書き直した》

以上のように未知語「HDL コレステロール」の問題処理には、「問題特定」だけで終わるもの、「問題特定」から「推測」への連鎖がみられるもの、「問題特定」、「推測」、「保留」から「確認」あるいは「精緻化」への連鎖がみられるものが観察される。このようなストラテジー使用は結果的に口頭要約課題に次のように反映している。

下の表3は、日本語話者5名と学習者10名の要約文で、ウォーキングの効用としてHDLコレステロールが増えるという要点(表3の4)が挙げられているかどうかを示したものである。

表3 「12週間ウォーキング健康法」の口頭要約採点結果

要 点	被験者														
	J1	J2	J3	J4	J5	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	F10
1. 12週間歩き続けると体が変わってくる。どこが変わるかと言えば、	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2. 同じスピードで歩いても脈が下がりドキドキしなくなり生活に幅ができる。	○	○	○	○	○	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○
3. 歩幅を広げて歩けば足の力が強くなり、危険に対処できる。	○	○	○	○	○	○	—	—	—	○	○	○	○	○	○
4. よいコレステロールが増える。	—	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5. 血圧が減少する。	○	○	○	○	○	○	—	○	—	○	—	○	○	○	○
6. 脂肪が減少する。	○	○	○	○	○	○	—	○	—	○	○	—	○	○	—
7. 高齢化社会に向かって、自分自身のためにも家族や社会のためにも、今歩ける人が歩き、健康を保ち続ける事が大事である。	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	○	○	○
8. だから歩くことを薦めた	—	○	○	—	○	—	○	—	○	○	○	○	—	—	○

表3において、「問題特定」から「保留」、「推測」、「確認」あるいは「精緻化」のストラテジーを引き続き使った被験者のJ2, J3, J4は、この独話の要点として「良いコレステロールが増える」を挙げていることがわかる。

一方、「問題特定」ストラテジー使用のみの F1 から F5 の被験者をはじめ、「問題特定」から「推測」への連鎖で終わっている F6 から F10, および J1 は「良いコレステロール」を要点として捉えきれずにいる。中でも、テキストの全体的文脈から「体にいい何かかふえてくる」と適切に推測している F10 の被験者が、その推測が記憶の段階まで到達していないことが特筆される。これは、J2 から J4 が後続語句の「HDL コレステロール」や「善玉のコレステロール」で「確認」したり、「精緻化」したりしているのに対し、F6 から F10 および J1 の被験者はその「確認」や「精緻化」のストラテジーを使わなかったことによるものと思われる。後続語句を知らなかったのか、推測している間にテキストが過ぎてしまったのかなど、後続情報で「確認」できなかった原因は特定できないが、「確認」のストラテジーを使うことが理解や記憶を確かなものにすることは明らかである。

「HDL コレステロール」に関しては、表 3 にみられる通り、日本語話者と学習者の間に大きな差が出ている。しかし、このことが日本語話者と学習者のストラテジー使用の違いをさすものとは考えがたい。すでに表 2 でみたように「問題特定」から「確認」へとつながる連鎖は日本語話者にも学習者にもみられるからである。

したがって、問題処理に際して「推測」あるいは「保留」のストラテジーから、問題が解決して「確認」や「精緻化」へと連鎖すれば、聞き取りの達成がさらに確実なものとなることが結論づけられる。この連鎖を起こすためには、問題が生じて、問題を保留したままテキストを聞き続ける聞き方が必要とされる。方法としては、ノートに書きとめるなどの外的で行動的なストラテジーを使うことが挙げられる。心理過程から一旦外に情報を出すことによって聞き取りの負担を軽くし、一方で問題を保留し、他方で進行中のテキストを理解するという二つの並行的な処理過程を円滑に進められると思われる。

以上述べてきたように、第二言語知識においては劣勢にある学習者にも、さまざまな問題解決への取り組みがみられ、言語知識の不足がすなわち聞き取れないという結果に結びつくものではないことがわかる。もちろん語彙などの言語知識やそれ以外の背景知識を学習者に与えることは教育上の必要条件ではあるが、聞き取りに必要なのはそれだけではないことはこれまでの分析結果が示している。

7. おわりに

本稿では、まず聞き取り上の問題を引き起こす原因を六つに分類した。[分節化]、[辞書的意味]、[テキスト上の意味]、[テキストからの派生]、[話し手の意図]、[その他の場面的要素]の六つである。次に日本語話者と学習者を対照させて分析した結果、両者ともに上記のどの原因にも分布がみられた。しかし、日本語話者の問題がテキスト上の意味解釈に起因するのに対し、学習

者は[分節化]や[辞書的意味]の言語知識の不足が大きな原因となっていることが相違点として挙げられる。

問題処理のストラテジーについては、「問題特定」、「自己モニター」、「保留」、「推測」、「聞き流し」、「確認」、「精緻化」、「内容へのコメント」、「話し方へのコメント」が抽出された。さらに「問題特定」だけで終わらない五つの問題処理のためのストラテジー連鎖が観察された。

このストラテジー連鎖の観点から、日本語話者と学習者の共通点は三つ挙げられる。両者ともに「問題特定」だけで終わってしまう問題処理が半数近くあること、「推測」を使った問題処理のストラテジーが多いこと、生じた問題を解決し「確認」あるいは「精緻化」へのストラテジー連鎖が観察されることの3点である。しかし、「問題特定」から「自己モニター」あるいは「聞き流し」と続く連鎖は学習者には観察されず、学習者には使いにくいストラテジーがあることがわかった。このように現時点での学習者には使いにくいストラテジーがみられるが、本来母語では使われているはずのストラテジーであることから、今後学習者の日本語能力の向上やストラテジー学習と共に、使用可能になると考えられる。

さらに、口頭要約で測定された聞き取りの結果から、問題が解決して新しい既存の知識に組み込まれていくには、「問題特定」、「推測」、「保留」から「確認」あるいは「精緻化」へと続くストラテジー連鎖が効果的であることが示唆された。

今後は、問題が生じた時に有効とみられるストラテジー連鎖を引き起こすようにするための練習方法の開発と実際の教育効果の検証が必要であると考えられる。

参 考 文 献

- 重松 淳(1985)「大学の講義スタイル分析のための予備調査報告(留学生の聴解授業のために)」、『日本語と日本語教育』第14号、慶應義塾大学国際センター。
- (1987)「大学講義のスタイル分析——大学講義を聞くことを目的とした聴解用テキスト作成のために」、『日本語と日本語教育』第16号、慶應義塾大学国際センター。
- 古川ちかし他(1992)「ペア形式による調査のプロトコル分析」、『日本語聴解問題の改善に関する考察——最終報告書』、日本語教育学会調査研究第1小委員会。
- 水田澄子(1995)「日本語母語話者と日本語学習者(中国人)に見られる独話聞き取りのストラテジー」、『日本語教育』87号。
- Chaudron, Craig and Jack C. Richards. 1986. The effect of discourse markers on the comprehension of lectures. *Applied linguistics*, Vol. 7, No. 2.
- Chiang, Shing Chung and Patricia Dunkel. 1992. The effect of speech modification, prior knowledge, and listening proficiency on EFL lecture listening. *TESOL quarterly*, Vol. 26, No. 2.
- Haastrup, Kirsten. 1987. Using thinking aloud and retrospection to uncover learners' lexical inferencing procedures. In Faerch, Claus and Gabriele Kasper (eds.), 1987. *Introspection in second language research*. Multilingual Matters.

- O'Malley, J. M., A. U. Chamot, and L. Kupper. 1989. Listening comprehension strategies in second language acquisition. *Applied Linguistics*, Vol. 10, No. 4.
- O'Malley, J. M. and A. U. Chamot. 1990. *Learning strategies in second language acquisition*. Cambridge University Press.